

35
2025. 5

薬友会報

千葉大学薬友会



新しい薬学部石碑銘板と満開の桜

薬友会長・薬学研究院長ご挨拶	2
退任のご挨拶	3
新任のご挨拶	3
特別寄稿	5
薬学部この一年	6
会員便り	9
研究室便り	11
クラス通信	14
支部便り	17
卒業アルバム	17
サークル紹介	18
学部だより	19
教員の人事異動	19

第110回 薬剤師国家試験合格状況	19
2024年度 卒業生・修了生の進路	19
2025年度 薬学部入学者の状況	20
2025年度 大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)	20
2024年の受賞記録	20
成績優秀賞・論文優秀発表者賞	22
薬友会より	23
第33回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー 宮本高明記念講演会開催のお知らせ	24
卒後教育研修講座開催のお知らせ	24

薬友会長・薬学研究院長ご挨拶 小椋 康光



薬友会員の皆様におかれましては、益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。昨年4月に薬学研究院長・薬学部長に着任した折に「薬学研究院のリブランディング ～為すべき研究・教育の達成に向けて～」という目標を掲げさせていただきました。具体的には「入学、奉職して良かったと思える学部・研究院」、「地域からも国際的にも求められる学部・研究院」及び「皆が輝ける学部・研学院」を目指して、この一年間の舵取りをさせていただきました。研究活動の活性化といたしましては、医学研究院との研究交流会（2024年6月）、園芸学研究院との研究交流会（2024年11月、松戸キャンパス）、国立医薬品食品衛生研究所との研究交流会（2025年3月、川崎キングスカイフロント）を実施いたしました。特に国立医薬品食品衛生研究所との研究交流会におきましては、同研究所長でもあり薬友会員でもあります本間正充先生にご尽力を賜りましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。また薬学研究院研究戦略セミナーを開講し、大型研究費獲得やさらなる医薬連携を志向した活動も行いました。国際活動を含めたその他の活動につきましては、本号の別掲記事をご高覧下さい。

千葉医科大学薬学専門部時代の校章をモチーフとして、千葉大学のスクールカラー（ガーネット）及び薬学研究院・薬学部の部局カラー（るり）を使用したロゴマークを作成いたしました。薬友会のwebsiteから画像データをダウンロードできますので、薬友会の活動の折にご使用いただければと思います。

また、ピンバッチやステッカーも作製いたしました（以下）。ピンバッチは、薬友会あるいは薬学部（千葉大学基金）に一定額以上の御寄附を頂戴した際に、返礼品としてお送りさせていただいております。これまで薬学研究院・薬学部の所在を示す建物の銘板が無い状況でしたが、2025年3月に医薬系総合研究棟IとIIの間の旧亥鼻校舎の屋根飾りが設置されている場所に、薬学研究院・薬学部を示す石碑銘板を設置いたしました（表紙写真）。ロゴマークや石碑名板が、教職員、学生及び薬友会の皆様方の帰属意識（Belonging）の向上に役立つことを願っております。

しばらく途絶えておりました薬友会報における広告掲載ですが、薬友会の永続的な活動を維持するため、今号より再開をさせていただきました。薬友会員の皆様に、事前に十分なお案内ができませんでしたことをお詫び申し上げます。次号以降も広告掲載を行いますので、是非ともご協力を賜れますようお願い申し上げます。お申し込み等の詳細は、薬友会事務局までお問い合わせください。

薬学研究院・薬学部は、さらなる発展を目指して全力を尽くしたいと思いますので、薬友会員の皆様方の一層のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。



ピンバッチ

ステッカー

退任のご挨拶

神崎 哲人



2024年11月をもって退職致しました。本来ならば2025年3月に退職の予定でしたので、皆様には多大なご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

私は千葉大学医学部を卒業し、初期研修の後に千葉大学医学部内科学第二講座（現 医学研究院内分泌代謝・血液・老年内科学講座）の脂質代謝研究室で動脈硬化症の基礎・臨床研究を始めました。そこでは、多くの優秀な先生方から科学のあり方、その精神についてご指導を賜りました。その後スウェーデン国ウプサラ大学に留学し遊走因子の一種であるTGF- β binding proteinの1次構造の決定などの仕事に従事する機会がありました。私はそこで、欧州における科学の伝統やその奥深さに気づき感激したことを覚えています。留学先の研究所のボスはCarl-Henrik Heldin先生でまだ40歳前でお若かったのですが、周囲の研究者、事務官のみならず大学も彼をサポートしていたことが私にもよくわかりました。その後2013年に彼はノーベル財団の財団長になられ、10年間責務を果たされました。さらにノーベル賞の生理学・医学賞の受賞者はウプサラ大学で講演することになっており、私も何度か受賞者の講演を拝聴させていただきました。その講演では決して難しい英語は使用されていないのですが、内容は超一流のお話でした。

私はこのような素晴らしい研究室で学んだのですが、そのような一流の科学者、教育者、臨床家にはとても及びませんでした。しかし、動脈硬化症の実態に迫り、臨床に少しでも役立てたいという気概は持っているつもりです。私は、人間は本当には真実を理解できないし、また真実に到達することはできないのではないかと思います。Godしか真実を理解できないのかもしれませんが、しかし、人間は科学という手段により少しでも真実に近づくように努力することはできます。物事を深く観察し考察・探求することが、我々にできることだと思います。

留学後は私立病院、公立病院や国立医療研究センター病院の内科医、成田空港検疫所の検疫官、私立大学の教員など多くの職場を経験しました。その後、千葉大学には2016年4月に赴任しました。ここでは、研究、教育とともに、企業との共同研究を行い産学連携を進めました。さらに、AIは研究・教育・臨床に取り入れられつつありますが、技術的問題（データの質の担保、バイアスの排除）、個人情報保護、倫理的問題や人の創造性に与える影響など多くの問題もあります。どのようにAIを使用するかがこれからの重要な課題です。

最後に、私が他学部出身にもかかわらず皆様からは常に暖かく接していただき、またご支援いただき、本薬学研究院で研究・教育を継続することができました。誠にありがとうございました。本学部・研究院の教職員の皆さまのご健勝とご活躍、そしてますますのご発展をお祈り申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

新任のご挨拶

高屋 明子



2025年2月1日付けで、千葉大学大学院薬学研究院 感染制御学研究室の教授を拝命いたしました。薬友会報の誌面をお借りして、千葉大学薬友会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は1999年3月に千葉大学薬学部を卒業し、その後、同大学院に進学いたしました。学部4年次より、澤井哲夫先生主宰の微生物薬品化学研究室に所属し、薬剤耐性菌について学ばせていただきました。大学院修士課程では、新たに教授に就任された山本友子先生のご指導のもと、細菌感染症について研究させていただく機会を得て、2001年3月に博士前期課程を修了いたしました。同年4月より千葉大学薬学部助手に採用され、同研究を継続し、2005年8月に学位を取得いたしました。その後、同年12月に講師、2009年10月に准教授となり、生物化学や微生物学に関する教育・研究に携わってまいりました。

この間、免疫微生物学研究室の川島博人先生や、活性構造化学研究室の石橋正己先生のもとで研究する機会をいただき、現在に至っております。これまでともに研究を進めてくださった学生の皆さんをはじめ、多くの方々に支えられながら、長い伝統のある母校の恵まれた環境のもと、研究を続けてこられたことに深く感謝しております。

研究においては、病原細菌が宿主に感染する際の応答に興味を持ち、「過酷な環境で排除されないために細菌は何をしているのか？」という疑問に対して、細菌学・分子生物学・生化学などの手法を駆使し、分子メカニズムの解明に取り組んでまいりました。当初は、細菌の病原因子産生制御に着目した研究を進めておりましたが、その過程で、宿主免疫と抗菌薬に対する細菌の応答に共通の分子機構を見出しました。現在はさらに、「薬剤耐性菌がなぜ出現するのか？」という課題にも取り組んでいます。そして、研究成果を社会に還元することを目指し、薬学部で蓄積された膨大な化合物ライブラリーを活用しながら、細菌感染を制御する化合物やワクチンの研究を展開しております。

COVID-19のパンデミックを経験し、未知の感染症にも対抗できる薬とワクチンの開発が、私たちの生活を維持する上で必要不可欠であることを改めて痛感いたしました。今後は、新しい感染症の発生にも動じることなく、社会に貢献できる人材の育成にも尽力してまいりたいと考えております。

薬友会会員の皆様方のご支援並びにご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶

山崎 伸吾



令和7年4月1日付けで千葉大学大学院薬学研究院、臨床薬物治療学研究室の教授を拝命いたしました。薬友会の紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は2003年に東北薬科大学を卒業後、千葉大学大学院薬学研究院の修士課程に進学し、上田志朗先生、佐藤信範先生にご指導いただきました。2005年より千葉大学医学部附属病院薬剤部へ入部し、医療薬学指導薬剤師、がん指導薬剤師、感染制御専門薬剤師などの資格を取得しながら臨床薬剤師として患者中心の医療を展開すべく業務の開拓、後進の育成などを行ってきました。「薬剤師として患者を救いたい」の一心で薬物治療を医師とともに考え、支援していく中で、患者の置かれた状況（臓器機能、経済的、本人の希望など）は様々であることを実感するとともに、薬剤師は薬物治療を最適化するために重要な職種であることも実感しております。一方で、新規作用機序の治療薬や副作用の少ない薬剤が市場されることで多くの患者が救われることも目の当たりにしてきました。千葉大学の学生には臨床や基礎に問わず、医療現場を想像できるようになって欲しいと思います。

2021年には石井伊都子先生の指導のもと「救急集中治療領域患者における薬物動態に関する研究」というテーマで学位を取得いたしました。東日本大震災での被災地派遣やCOVID-19などを乗り越える中で薬剤部入部から長い時間がかかりましたが、日常業務の傍ら研究を継続する臨床薬剤師としての一つのあり方だと思います。これまでの様々な経験を通じて、広い視野を持った人材を育成しながら薬学研究院の発展に寄与していきたいと考えております。

医学薬学府・副学府長挨拶

山崎 真巳



本年度より2年間医学薬学府副学府長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

昨今の目まぐるしく変化する社会情勢、地球温暖化による気候変動および今までに経験の無い自然災害や新たな感染症の出現など、私たちを取りまく環境は刻々と変化しています。このような現代社会において人々の健康に貢献することができる、高度な専門知識を有す優れた創業人材ならびに医療人材がますます求められています。私たちは基礎生命科学ならびに医薬品創製に貢献できる国際性豊かな独創性ある研究者および高度の専門技術と研究能力を備えた先進的医療人の次世代リーダーの育成を目指して教育研究を行っています。

昨年度は、修士課程総合薬品科学専攻41名、4年博士課程先端医学薬学専攻（薬学領域）5名ならびに後期3年博士課程先端創薬科学専攻8名がそれぞれの課程を修了しました。このうち4年博士課程の2名と3年博士課程3名は優れた研究業績が認められ、早期修了しました。本年度は4月より修士課程総合薬品科学専攻45名、4年博士課程7名、後期3年博士課程9名の新入生を迎え、また新しい一年が始まりました。

医学薬学府では、大学院生の生活や研究活動を支援するために、文部科学省の卓越大学院プログラムによる「革新医療創生CHIBA卓越大学院」、科学技術振興機構（JST）「次世代研究者挑戦的研究プログラム」による「全方位・挑戦的融合イノベーター博士人材養成プロジェクト」ならびに博士課程教育リーディングプログラム等による優秀な博士課程学生の支援を行っています。安心して学修・研究活動に専念できる環境を提供することにより、国内外の大学や研究所、製薬をはじめとする企業、大学病院などで新しい医療・創薬を創造するリーダーとなりうる人材の育成に努めています。また、大学院の秋入学や海外協定校とのダブルディグリー／デュアルディグリー制度により、多様なグローバル人材の育成に力を入れています。

今後も、薬学・医学の未来を担う重要な人材となる修士・博士課程学生の育成に努力してまいります。引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力を何卒よろしくお願いいたします。



日本薬学会初の女性会頭に期待する

佐藤 哲男

千葉大学名誉教授，日本薬学会有功会員

令和7（2025）年4月より石井伊都子教授が日本薬学会会頭に就任されました。日本薬学会は明治13（1880）年に創立された我が国で最も古い学会の一つです。約30名でスタートした本学会は現在会員数約15,000人の学会に成長しました。初代会頭はエフェドリンの発見で世界的業績を挙げた長井長義博士です。この度、石井教授の会頭就任は日本薬学会史上初めての女性会頭の誕生です。石井教授は、現在、千葉大学医学部附属病院教授、医学研究院（薬物治療学）および薬学研究院（医療薬学研究室）の教授を兼務、薬剤部長および副病院長の要職に当たられております。

私は昭和50（1975）年4月から当時北川晴雄教授が主宰していた西千葉キャンパスの薬学部一号館4階にあった薬物学研究室の助教授として勤務していました。その頃、石井教授は3階の生化学研究室の廣瀬聖雄教授のもとで学生としてご在籍していたので毎日お会いする機会がありました。私は昭和59（1984）年4月に東京薬科大学に転出しましたが、昭和63（1988）年に北川教授の急逝に伴い、同年4月から北川教授の後任として薬物学研究室に復帰しました。

石井教授は昭和63（1988）年3月に薬学部をご卒業されました。その後、千葉大学薬学部生化学研究室教務職員、助手を経て、平成11（1999）年には米国National Institute of Health（NIH）博士研究員（ポスドク）として研究に従事しました。帰国後、平成13（2001）年に千葉大学大学院薬学研究院を経て平成15（2003）年には薬学研究院病院薬学研究室准教授となりました。平成24（2012）年9月に千葉大学医学部附属病院薬剤部教授・薬剤部長となり、同時に薬学研究院医療薬学研究室教授にご就任されました。また、令和6（2024）年には「永井記念国際女性科学者賞（日本薬剤学会）」を受賞されております。

私が学生だった昭和20年代の薬学教育は4年制であり、その教育内容は主として化学、生物、物理など基礎科学を中心としており医療薬学に関する科目は薬剤学など限られていました。また、日本薬学会会員の多くは大学や研究機関の研究者でした。

平成18（2006）年に薬学教育が4年制から6年制に移行した後は医療技術の高度化、医薬分業の進展などに伴って、医療薬学の知識を持つ薬剤師の養成が薬学教育の目標になりました。具体的には、教育の現場で病院・薬局などの実習を通して患者と面談したり、臨床薬学に関する講義が増えています。

石井教授は千葉大学病院薬剤部長になってからは医療の最前線でご活躍されています。まさに薬学教育が6年制に移行した目的に沿って臨床に習熟した薬剤師の養成に当たっております。これまで千葉大学薬学部関係者で日本薬学会会頭になられたのは第38代（昭46年4月1日～昭和48年3月31日）の宮木高明先生のみです。宮木先生は初代薬学部長（昭和24（1949）年ご着任）でした。ちなみに、昭和24年に千葉大学薬学部薬学科（4年制、定員40名）は千葉医科大学附属薬学専門部を母体として発足しました。この度の石井教授の会頭就任は千葉大学薬学部および同窓生として大きな誇りです。なお、廣瀬聖雄教授は私と同じ年齢で親しくさせて頂き、平成8（1996）年に一緒に定年退職しました。その後、お元気で過ごされていましたが、残念ながら令和5（2023）年11月10日に93歳でご逝去されました。

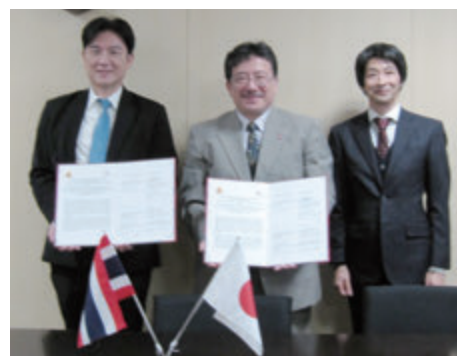
最後に、かつての優秀な教え子がこの度140年以上の長い歴史を持つ日本薬学会の史上初めての女性会頭になったことは感慨無量です。日本薬学会が今後どのように発展するか、新会頭のご活躍を祈念致します。

薬学部この一年

タマサート大学薬学部との部局間協定の締結

国際交流・留学生委員長 森部 久仁一

タマサート大学（Thammasat University）は1934年にタイ民主主義の父、プリーディー・パノムヨンによって創設された歴史のある国立大学で、1980年代以降、薬学部を含む総合大学となっています。タマサート大学薬学部の国際交流担当教員が以前本学薬学部にて短期留学していたことがきっかけで部局間交流協定を締結する運びとなり、2024年4月3日、千葉大学にて、Arom Jedsadayanmata薬学部長、小椋康光大学院薬学研究院長、伊藤素行大学院医学薬学府長によって学術交流協定書に調印しました。また、その後交流を続ける中で、学生の交換留学を行いたいとの打診があり、協議の結果、2024年12月11日に学生交流協定を締結しました。今後、インターンシップ学生の受入による学生交流が活発になることが期待されます。

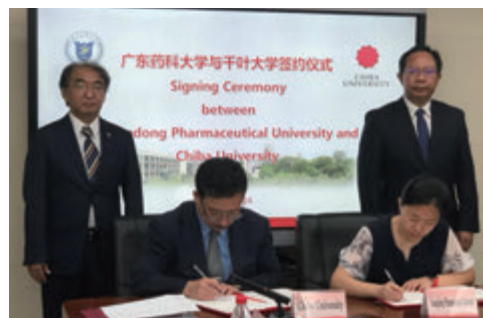


協定書を示す3名、
左から、
Arom Jedsadayanmataタマサート大学薬学部長、
小椋康光大学院薬学研究院長、
伊藤素行大学院医学薬学府長

広東薬科大学薬学部との部局間協定の締結

国際交流・留学生委員長 森部 久仁一

広東薬科大学（Guangdong Pharmaceutical University）は1958年創立の「広東省衛生幹部進修学院」が前身の大学で、薬学を主体として医学、理工、文化系学部も備える総合大学です。千葉大学では医学部が協定に基づく学術交流を実施していて、2023年11月に広東薬科大学の訪問団が本学を訪問した際、薬学研究院との部局レベルでの協定締結の打診があり、協議の結果、協定締結に至りました。2024年5月27日、広東薬科大学にて、Yan Chunyan薬学部副学部長、小椋康光大学院薬学研究院長によって学術交流協定書・学生交流協定書に調印しました。今後、教員間の交流やインターンシップ学生の受入による学生交流が活発になることが期待されます。



協定書に調印する2名、
前列左から、小椋康光大学院薬学研究院長、
Yan Chunyan広東薬科大学薬学部副学部長

国立成功大学医学部（薬学科、臨床薬学研究所、薬理学科、環境・労働衛生学科）との部局間協定の締結

国際交流・留学生委員長 森部 久仁一

国立成功大学（National Cheng Kung University）は1931年に創設された国立総合大学で、台湾の中でも薬学分野をはじめ幅広い分野でトップクラスの研究レベルを誇っています。本学の教員との研究交流や本学訪問をきっかけに薬学研究院との部局レベルでの協定締結の打診があり、協議の結果、協定締結に至りました。2024年10月14日、国立成功大学医学部にて、Yan-Shen Shan国立成功大学医学部長ほか薬学科長、臨床薬学研究所長、薬理学科長及び環境・労働衛生学科長、小椋康光大学院薬学研究院長によって学術交流協定書に調印しました。今後、教員間の研究交流が活発になることが期待されます。



協定書に調印する2名、
前列左から、小椋康光大学院薬学研究院長、
Yan-Shen Shan国立成功大学医学部長

第1回 医学研究院および園芸学研究院との研究交流会を開催

生化学研究室 伊藤 素行

2024年6月5日、医学研究院と薬学研究院の研究交流会が医学系総合研究棟で開催されました。プログラムは、YIA (Young Investigator Award) ショートトーク、ポスターディスカッション、表彰式と懇親会が行われました。発表者は医学研究院から30名、薬学研究院から36名で、口頭発表は24演題、発表者は全員ポスター発表を行いました。YIA受賞者は遠藤将大(医学)、黒杉茜(医学)、加納永梧(薬学D1)、築山風香(薬学M2)、吉次陸貴(薬学M2)でした。さらに、2024年11月26日には松戸キャンパスにて、園芸学研究院と薬学研究院の研究連携懇談会が開催されました。薬学部からの参加者の多くはバス2台をチャーターして会場に到着しました。会の開始前には、園芸学研究院のある松戸キャンパスを巡るツアーが行われ、参加者は広大なキャンパスの魅力を堪能しました。口頭発表が13演題(園芸7名、薬学6名)、ポスター発表が73演題(園芸44名、薬学29名)行われ、薬学部からは教員を含めて約50名が参加しました。若手研究者の口頭発表優秀賞には、園芸学部から平林ゆうき(M1)、薬学部から栗原崇人助教と奥田朱里(M1)が選ばれました。両交流会とも、懇親会が同じ会場にて開催され、参加者はドリンクと軽食を楽しみながら大いに盛り上がりました。参加者たちは研究の成果や今後の連携について熱心に語り合い、充実した時間を過ごしました。両交流会は、医学および園芸学と薬学の研究連携を深める貴重な機会となり、今後のさらなる発展が期待されます。



園芸学研究院-薬学研究院交流会2024



園芸-薬学交流会 口頭発表優秀賞者

第1回 国立医薬品食品衛生研究所・千葉大学大学院薬学研究院研究交流会を開催

製剤工学研究室 森部 久仁一

2025年3月17日(月)、川崎キングスカイフロントの国立医薬品食品衛生研究所にて、第1回 国立医薬品食品衛生研究所・千葉大学大学院薬学研究院研究交流会を開催しました。本間正充国立医薬品食品衛生研究所長のご挨拶・研究所紹介と所内見学ののち、千葉大学から16件、国立医薬品食品衛生研究所から14件、計30件の研究発表がありました。場所を移しての懇親会での交流を含め、研究所と大学の研究内容や研究者を知る有意義な機会となり、今後の交流や共同研究に繋がることが期待されます。ちなみに第2回は千葉大学で、若手を中心とした交流会を実施する予定です。



交流会懇親会の一コマ

チュラポーン研究所・大学院大学とのシンポジウム開催

薬化学研究室 根本 哲宏

2025年1月27日(月)、28日(火)にタイ王国のチュラポーン研究所(Chulabhorn Research Institute: CRI)、チュラポーン大学院大学(Chulabhorn Graduate Institute: CGI)と、薬学研究院との共催による国際シンポジウム「The 5th CRI-CGI-Chiba Symposium in Chemistry and Biomedical Sciences」を開催しました。本シンポジウムにはCRI・CGIから12名の研究者の方々をお招きして、有機化学・ケミカルバイオロジーから生化学・衛生化学に及ぶ薬学の幅広い領域で、口頭・ポスター発表を行いました。また、タイ王国の研究者の方々は滞在期間中に、本学医学部附属病院薬剤部



CRI・CGIからお招きした先生方とともに、千葉大学薬学部創立120周年記念講堂にて

を見学され、日本の病院薬剤師の職務や役割についてより深く知っていただく機会となりました。CRI・CGIは、タイ王国チュラポーン王女殿下が代表を務められているタイのトップ研究機関の1つです。千葉大学とは2013年に大学間協定を締結して以降、大学院薬学研究院を中心に研究者・学生間の交流が進んでおり、コロナ禍で中止やオンライン開催となったこともありましたが、2019年度以降、継続的にシンポジウムを共催してきました。また、CGIと医学薬学府との間でDual Degree Programを実施しており、現在も複数のCGIの大学院生が医学薬学府に在籍しています。今後も共同でのシンポジウム開催や学生の相互交流を通して、研究、教育の両面でネットワークの強化が期待されます。

「2024 Student Workshop on Pharmaceutical Sciences between Chiba University and Fudan University」を開催して

生物薬剤学研究室 伊藤 晃成

2024年8月29日（木）、千葉大学薬学研究院と復旦大学薬学院の間で表記ワークショップを開催いたしました。復旦大学薬学院は、1936年に設立された国立上海医学院薬学専修科を起源とし、1986年に上海医科大学薬学院に改称され、2000年に復旦大学（1905年設立）と合併して現在に至ります。上海医科大学時代から中国トップクラスの薬学院とされ、強力な学術基盤のもと、教育・研究ともに国内外で高く評価されています。ワークショップでは、復旦大学から教員2名と様々な研究分野の学生5名が、千葉大学からは複数研究室の教員・学生が参加し、双方から学生5名ずつが研究発表を行いました。学生を中心に活発な質疑応答が行われ、互いの研究テーマやアプローチに関して新たな視点を得る貴重な学術交流の機会となりました。特別講演では、千葉大学で博士号を取得後、量子科学技術研究開発機構（旧放射線医学総合研究所）を経て現在復旦大学で活躍されているBin Ji（季斌）教授が「Molecular Imaging for Neuroinflammation」のテーマで、PETイメージング技術を用いた神経炎症の新しい評価法とその最新知見を共有されました。復旦大学薬学院は、医学薬学府の学生がENGINE留学プログラムで選択できる留学先の一つであり、本ワークショップを契機に、両大学間の学生・教員の連携が一層深まることが期待されます。



ワークショップ後の記念写真、前列左から2人目が季教授

プレスリリースされた薬学部の研究

- 2024年2月8日 「免疫の不思議：免疫はなぜ、自己組織を攻撃しないのか ―自己免疫疾患を防ぐ胸腺オートファジーの誘導機構を解明―」 分子心血管薬理化学研究室 高倉勇氣、高野博之、山口憲孝
- 2024年2月20日 「パーキンソン病は性別と遺伝子によって進みが変わる 女性では22%、遺伝子LRRK2の変異によって最大26%進行が遅延」 臨床薬理化学研究室 神亮太、吉岡英樹、佐藤洋美、樋坂章博
- 2024年2月20日 「慢性心不全の運動療法の効果は人により異なる可能性が―45%の患者では明確な効果を示すが、15%の患者では逆効果かも―」 臨床薬理化学研究室 副島裕佳子、吉岡英樹、畔さゆり、佐藤洋美、畠山浩人、佐藤泰憲、藤本善英、安西尚彦、樋坂章博
- 2024年3月28日 「独自開発の計算科学―情報科学―実験科学の融合手法で新たな環化付加型反応を開発!」 薬化学研究室 原田慎吾、根本哲宏
- 2024年3月29日 「がんの細胞死を制御するタンパク質の新たなしくみを解明～HDM2をターゲットとした新たな抗がん剤開発への応用に期待～」 薬品物理化学研究室 渡邊一樹、岩月亮介、福井涼太、趙慶慈、西田紀貴
- 2024年4月2日 「薬物による副作用が皮膚で起こりやすい原因を発見～ヒト白血球抗原を介した細胞内からのストレスが引き金～」 生物薬剤学研究室 風岡顯良、青木重樹、伊藤晃成ほか
- 2024年6月24日 「新薬開発に役立つ複雑な化合物の1 工程合成に成功～ランタノイドが拓く創薬と環境の未来～」 薬化学研究室 原田真至
- 2024年7月29日 「可視光エネルギーでサマリウムを還元する配位子開発に成功―希土類元素（レアアース）であるサマリウムの使用量を100分の1以下に削減―」 薬化学研究室 栗原崇人、根本哲宏
- 2024年9月3日 「Targeted Cancer Therapies: Getting Radioactive Atoms to Accumulate in Tumors」 分子画像薬品学研究室 上原知也
- 2024年10月1日 「NMR-Guided Optimization of Lipid Nanoparticles for Enhanced siRNA Delivery」 製剤工学研究室 植田圭祐
- 2024年10月3日 「蠟梅（ロウバイ）の種子から新しい作用機構をもつ不斉有機触媒を発見 ―千葉大学天然物ライブラリーの活用と化学的応用―」 中分子化学研究室 山西恭輔、石川勇人 薬化学研究室 原田慎吾
- 2024年10月17日 「遺伝性脳小血管病を促す変異タンパク質蓄積の機構解明」 生化学研究室 鈴木翔大、伊藤素行

会 員 便 り

石原 菜々花（株式会社ADEKA）



私は昨年度まで薬品合成化学研究室に所属し、山次健三先生、荒井秀先生、笠原彰友先生、原田真至先生のご指導の下、有機合成の反応開発や全合成に取り組みました。今年度からは化学メーカーに勤務し、半導体材料の研究開発業務に携わっています。薬学とは全く異なる分野に飛び込み新鮮さを感じるとともに、培った有機合成の学びを活かしていることを嬉しく思っています。

社会人一年目は、大学研究と企業研究のギャップに驚かされる日々でした。企業での研究では、品質管理や安全面、コストパフォーマンスといった側面が重要視され、有機化学のみならず各種分析機器、実機設備、法規制といった幅広い知識や、スピード感のある業務が求められます。検討内容を精査したり、複雑な書類作成や手続きに頭を悩ませたり、数週間工場へ赴き自分の手で設備を動かしたり…など、慣れない業務に難しさを感じることもありますが、様々なバックグラウンドの先輩や同期に支えられながら日々奮闘しています。

最近では主体となって行う業務が増え、楽しさと同時に一層身が引き締まる思いがあります。これからは自分自身も周囲に貢献していけるよう、向上心と感謝の気持ちを大切にしながら励んでいきたいです。

岩田 紘樹（慶應義塾大学薬学部 医療薬学・社会連携センター 社会薬学部門）



私は修士1年までは矢野眞吾先生の薬物治療学研究室にて、修士2年からは高齢者薬剤学研究室（現 臨床薬理学研究室）にて上野光一先生、山浦克典先生、佐藤洋美先生にご指導いただき、2011年に博士課程を修了しました。その後、保険薬局に勤務し、処方箋調剤や在宅訪問業務に従事しました。4年目に入り薬局長も任されるようになった頃、高齢者薬剤学の山浦先生が慶應義塾大学薬学部教授としてご栄転される時にお声掛けいただき、2015年に大学の世界に戻りました。

慶應義塾大学のキャンパス内には薬学部附属薬局があり、大学着任後も週1回薬剤師業務を行って臨床経験を継続しています。薬機法改正や診療報酬改定で薬剤師に求められることが変化する中、学生への講義・実習では、最新の情報を実際の患者対応事例も交えて伝えるように心がけています。研究面では、疾病予防やセルフケアにおける薬剤師の役割や有用性に注目しています。附属薬局も研究フィールドとし、来局された患者さんを対象とした調査研究も行っています。研究を通じて薬剤師の価値を発信すべく取り組んでいます。

学会に参加すると千葉大学でお世話になった先生方だけでなく、同期と再会することもあり、その活躍している姿には大きな刺激を受けます。早いもので大学教員になって丸10年。忙しい日々ですが、2人の息子の成長を楽しみにしながら、私自身もさらに成長できるよう精進していきたいと思います。

西田 匠吾（日本新薬株式会社 創薬戦略部 起案戦略課）



私は学部4年生から6年生まで、免疫微生物学研究室にて川島博人先生にご指導いただきました。当時を振り返ると、薬局・病院実習により時間的制約がある中で、なんとか成果を上げたいという気持ちを胸に、昼夜問わず研究に明け暮れたことを懐かしく思い出します。そんな私の思いを理解し、数多くの挑戦の機会を下さった川島先生のもとで学べたからこそ、今の私があるのだと思います。

卒業後は日本新薬株式会社に入社し、つくばの研究所で3年間、核酸医薬品の研究に従事しました。学生時代にかなり多様な実験系に触れる機会があったことが奏功して、分野は全く異なるものの、研究室で培った経験を業務に直接活かしています。今年度より京都本社に異動となり、新規創薬テーマの立案を使命とする部門において、自ら実験もしつつ成功確度の高いテーマの創出に向けて日々奮闘しています。起案時のコンセプトが創薬の成功確度を決めるといっても過言でないため、なかなか難しい業務ではありますが、やりがいをもって取り組んでいます。研究を楽しむ気持ちを忘れず、価値の高い新薬を自らの手で創出することをモットーに、今後も精進して参ります。

梶原 理希（大塚製薬株式会社 研究管理部）

2020年に生化学研究室を卒業し、現在は大塚製薬株式会社の研究管理部に所属しています。この部署で、医療用医薬品の基礎研究を行う研究部門のデジタル化を推進する業務に携わっています。

近年、大規模言語モデルの社会実装が急速に進み、さまざまな業務において日常的に使われるようになりました。さらに、生命科学分野においてもアミノ酸配列からタンパク質の立体構造を高精度に予測する画期的な技術であるAlphaFoldが昨年ノーベル化学賞を受賞したことに象徴されるように、デジタル技術が創薬研究に革新をもたらしつつあります。

このような背景を踏まえ、私は最新の機械学習技術の情報収集や社内展開、実験データの解析支援、クラウドを活用したシステム基盤の構築など、研究所のデジタル化に必要な幅広い技術支援を行っています。生化学研究室でウェットの研究を行っていた経験を活かし、研究現場に寄り添いつつ、より効率的で先進的な創薬研究を実現することを目指しています。

技術の進歩が著しい一方で、創薬につながる成果を生み出すことには依然として困難も伴う分野ではありますが、データ駆動型の創薬手法が徐々に実用へと近づいている手応えを感じる場面も増えてきました。その最前線で仕事ができることは刺激的であり、やりがいを感じています。

竹内 理彩（警視庁科学捜査研究所）



私は薬物化学研究室にて、櫻井先生、田中先生並びに秋田先生のご指導のもと、ドラッグデリバリーシステム（通称DDS）の研究に携わりました。学部4年の時に就職するか院に進むかはっきりしない中、1年あるいは院進しても研究が行えるようテーマを組んで下さいました。結局1年で研究室生活を終え卒業することになりましたが、研究を進めるにあたっての思考のプロセスや、研究者になるにあたっての基礎を教えて下さった教授陣に感謝しています。また、短くも濃い研究生活を支えて下さった先輩方や同期との出会いにも心から感謝しています。

現在は、警視庁科学捜査研究所に所属し、大麻や覚醒剤といった禁制薬物の分析を行い、日々東京を始めとする日本全国の犯罪に関わる薬物の検査をしています。禁制品の分析では、被疑者の所持品に違法性のあるものがないか、見落としがないよう注意深く観察する必要があります。大雑把な自分の性格とは相反する業務で大変ですが、やりがいがあり自分の頑張りにより日本の治安が保たれる大事な仕事だと思っています。今年で5年目になりますが、日々禁制品は形を変え現れるので、知識を常に更新する必要がありますが飽きることがありません。興味のある方はぜひ各都道府県の警察HPに採用案内が載っていますので確認してみてください^^

高梨 憲幸（第一三共株式会社 研究開発本部 モダリティ第三研究所）



私は私大から千葉大学に博士課程で入学し、生体機能性分子研究室（現・中分子化学研究室）の高山廣光先生の下で3年間、天然有機化合物の全合成研究に取り組んでおりました。比較的在学歴の浅い原稿執筆者ですが、学内の風景がドラマのロケ地として映るのを見ると、亥鼻キャンパスでの研究生活が懐かしく思い出されます。早いもので卒業から9年が経ち、第一三共株式会社に入社後はメディシナルケミスト、内2年間はデータサイエンティスト見習いとしてのキャリアを積ませて頂きました。現在は、幸運にも留学の機会に恵まれ、米国プリンストン大学でPhotoredox反応の開発に従事しています。久々のアカデミアは千葉大時代を彷彿とさせる（とりわけラボ滞在時間の長い）生活で、日々のセミナーや学生の高いモチベーションと勢いに大いに刺激をもらっています。一方で環境・生活拠点の変化に伴い、いかに日本での会社員の身がコンフォートゾーンであったかを痛感させられます。英語の壁は想像以上に高く、化学の知識・経験を頼りに試行錯誤する毎日です。これも私自身の成長の過程と思い、貴重な経験を楽しみながら過ごしたいと思っています。

田所 真一（薬剤師）



私は、遺伝子創薬学（公益財団法人かずさDNA研究所）研究室にて小原収先生、中山学先生のご指導を賜り、2007年に修士課程を修了しました。その後数年間、研究の場を転々とした後、現在の調剤薬局業界に身を置き、日々薬剤師として奮闘しております。コロナ禍において「PCRや mRNA」などの言葉を、メディアを通じて聞く度に、研究していた頃を懐かしく感じておりました。薬局薬剤師は、薬局において処方箋に基づき調剤業務を実施する他、在宅医療においても積極的に活動しております。地方では人口減少に伴う医療機関の撤退等で、特に交通インフラの整っていない所謂過疎地においては、医療機関を受診することすら難しい方々が数多くいらっしゃいます。終末期に限らず、そういった方々への在宅医療の実施となった場合、薬剤師として多職種（ケアマネージャー等）の方々と連携しながら、医療の質の向上、患者様に見合った医療サービスの提供を模索しております。現在は、会社の執行役員という立場にあり、調剤薬局は今後どうあるべきか？会社として何ができるのか？を日々考えております。より良い医療を届ける薬局づくり・薬剤師の育成に力を入れていきたいと思っています。

塩川 絢子（協和キリン株式会社 開発本部 臨床開発センター）



2014年に薬学部に入學し、2017年から卒業までの3年間、予防薬学研究室にて小椋先生、鈴木先生、田中先生にご指導いただきました。卒業後は協和キリン株式会社に入社し、新薬の臨床開発業務に従事しています。入社後の5年間で、まずはモニターとして複数の治験実施医療機関の立ち上げからクローズを経験し、その後、国内試験のClinical Operation Leaderを経験し、現在はグローバル試験のClinical Operation Leaderとして、1日でも早く新薬を開発すべく日々邁進しています。社内外の様々なステークホルダーに対して説明・交渉する機会が多く、立場の異なる方に対してどのようにアプローチすれば期待する結果が得られるのか考えさせられる毎日です。研究活動で培われた、計画的に実験を行い、結果を考察し、情報収集して改善・更なる検証を繰り返し、解決に導く力は仕事でも生かされていると感じます。

新薬開発は困難の連続ですが、正解がない中で様々な視点から意見を出し合い、チームで壁を乗り越えていく楽しさもあります。また、国内外の医師の先生方と話す中で、開発している新薬が臨床現場で必要とされている声を聞くと自身の仕事にやりがいを感じます。仕事もプライベートも楽しみながら、着実に成長していけるように今後も色々なことに積極的に挑戦していこうと思います。

研究室便り

他の研究室は次号に掲載します

遺伝子資源応用

遺伝子資源応用研究室では、2023年1月に杉山龍介先生が助教として着任し、2024年3月にMEGHA先生が米国イリノイ大学に異動しました。また、2023年12月から3カ月間、当研究室で学位を取得したタイのマヒドン大学のSomnuk Bunsupa先生が滞在しました。2025年3月現在、教員3名、大学院生5名（博士課程2名、修士課程3名）、学部生15名で、研究活動に励んでいます。添付の写真は、研究室に保管されていた、薬学部創設の頃の植物画です。本年7月の薬友会生涯教育セミナーでは、当研究室OBが最先端の研究について講演します。セミナー後には同窓会も行いますので、是非、ご参加ください。



臨床薬理学

臨床薬理学研究室は3月に樋坂章博教授が定年退職となり、2月の薬学部における最終講義に加えて4月には同窓生で記念祝賀会を行いました。令和7年2月現在でスタッフは佐藤准教授1名、学部生8名、大学院生5名、客員研究員1名、客員教授1名で小規模精鋭に営まれています。樋坂先生や研究員の吉岡先生にはオンラインでディスカッションやゼミに参加いただきながら、臨床情報を資源にモデリングや機械学習をフル活用、また、脳腫瘍や糖尿病、そして薬物吸収予測のための実験を精力的に行い、臨床応用を目指しています。春には修士の薄木・佐藤の2名、6年生の高橋が修了/卒業・進学となり、新年度を迎えます。



生物薬剤学

2025年4月現在、教員3名、大学院生6名、学部生9名の体制で、医薬品副作用の分子メカニズムの解明やその回避に向けた研究を継続しています。直近2年間の主な出来事を紹介します。以前より交流のあるカナダ・アルバータ大学からの留学生が2023年7月から3ヶ月間研究室に滞在しました。同年11月に、伊藤教授が大会長を務め、日本動物実験代替法学会第36回大会を西千葉キャンパスで開催しました。2024年8月には、研究室OBで現在は復旦大学薬学院教授の季さんが来学し、部局間のワークショップを開催しました。同年10月には、青木講師が准教授へ昇任しました。引き続き研究・教育の両面でさらなる発展を目指してまいります。



医療薬学

R5年4月に内田雅士助教が薬剤部に薬剤主任・病院臨床准教授として異動し、石川雅之助教が着任しました。同年7月には鈴木貴明准教授が山梨大学医学部附属病院薬剤部に特任教授・薬剤部長として昇任・転出し、同年10月に薬剤部の山崎伸吾准教授が研究室兼務となりました。R7年度は教員3名、学部学生8名、博士課程学生5名が在籍し、形成外科領域での外用薬開発を目指す研究や動脈硬化に関連した基礎研究など幅広いテーマに取り組んでいます。R6年度は石井教授の還暦祝賀会兼同窓会や千葉大学・山梨大学薬剤部との親睦旅行を行いました。今後も多くの方々とのつながりを大切にしながら、医療に役立つ情報を創出できるよう取り組んでいきます。



薬化学

卒業生の皆さん、最近の根本研究室の動向は以下の通りです。

☆2024年夏、恒例の研究室旅行は学生のみで楽しみました。

☆2024年8月、学部生が大学院入試に無事合格しました。

☆2024年9月、3年生6名、博士後期課程2名が根本研究室に配属されました。

☆2024年10月、原田慎吾先生が准教授に昇任されました。

☆2025年3月、辻菜々美さん、富田啓輔さん、古谷茉衣花さん、南太久海さん、小高由子さん、松本ゆきのさんが社会に飛び立ちました。奥田優真さんは博士後期課程に進学です。

2025年度は総勢30名以上で研究室をスタートします！



薬品合成化学

薬品合成化学研究室は2023年4月より山次教授の着任に伴い、新たな体制が発足しました。現在は教員3名、大学院修士課程3名、学部生13名の総勢19名が一致団結して、合成化学とタンパク質化学を両輪にオリジナル研究を展開しています。日々の研究や短期海外留学に励む学生諸氏の姿を目の当たりにし、経験の積み重ねが晴らしい研究成果に発展するものと期待しています。卒業生の方々には、お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りいただけますと幸いです。



製剤工学

2年間のTopicsです。森部教授は評価担当の副学長、国際交流担当の副研究院長です。植田助教が日本薬学会奨励賞、日本薬学会関東支部奨励賞を受賞しました。卒業生12名は、1名が大学教員（インド）、1名が他大学院進学（アメリカ）、9名が製薬会社研究職、1名が薬局薬剤師として活躍しています。また、海外雑誌に20報以上の論文を発表、また9名の学生が諸学会で優秀発表賞を受賞しました。中国・インド・タイからの留学生も在籍し、英語が飛び交っている環境で楽しく・賑やかに過ごしています。お近くにお越しの際は、是非研究室まで遊びに来てください！



中分子化学

中分子化学研究室には、4月に楽満憲太助教が着任し、スタッフは3人体制となりました。学生は大学院生15名（博士前期課程9名、博士後期課程6名）と学部生12名（薬学科5年生および6年生を含む）の計27名で、天然物化学、有機合成化学、医薬品化学の研究に日々励んでいます。石川が日本薬学会学術振興賞を受賞したほか、学生も日本薬学会年会学生優秀発表賞など、いくつかの賞を受賞することができました。また、1960年から受け継がれる天然物ライブラリーから新たな生物活性が数多く発見され、学内外の共同研究へと発展しています。生体機能性分子および中分子化学研究室の卒業生、修了生の皆さま、ぜひお気軽にお立ち寄りください。



環境リスク研究室（国立環境研究所）

環境リスク研究室は、2001年から国立環境研究所（つくば市）に設置されている連携講座です。現在は中島大介教授、小林弥生教授及び鈴木武博准教授（いずれも環境リスク・健康領域）の3名で構成されています。主な研究テーマは、有機汚染物質の高感度網羅分析法の開発、分析毒化学的手法を用いた半金属元素の代謝機構の解明、化学物質による健康影響評価のためのヒューマンバイオモニタリング手法の開発、化学物質の曝露評価と生体影響及び化学物質による次世代影響メカニズムに関する研究です。当室で学ぶ若い方に期待しています。見学は随時、歓迎します。



かずさDNA研究所（遺伝子創薬連携講座）

遺伝子創薬研究室は、かずさDNA研究所との連携講座です。1）中山らは、新規部位特異的組み換えシステムの開発を通してゲノム中の特定の遺伝子や領域を人工的に変化させるゲノム改変技術開発及び疾患モデルマウスの作製支援、2）櫻井らは、質量分析装置を用いたメタボローム解析により新規有用成分の探索研究など、3）白澤らは、新型シーケンサーによる薬用植物の全ゲノム解析と遺伝子予測、ならびに薬用植物のゲノム育種法の開発に関する研究を行っています。我々は、生命のゲノム情報を基に、DNA塩基配列決定技術や質量分析技術を駆使し、新しい創薬への道筋を生み出せたらと願っております。



創薬物性研究室

本研究室は、2019年4月に千葉大学大学院と武田薬品工業株式会社との連携講座として、神奈川県横浜市の湘南ヘルスイノベーションパーク（iPark）内に創設された。主たる研究テーマは①医薬品の新規物性評価技術に関する研究、②医薬品創製を目指した物性改善および改善戦略に関する研究、③医薬品生産に寄与する分析法・物性評価法の研究、④物性評価技術によるデバイス、非経口投与ルートなどアドヒアランス向上に関する研究、⑤レギュレトリーサイエンスに関する分析・物性研究である。

本研究室は2024年度に博士後期課程の学生1名を送り出し、現在客員教員2名が所属している。iParkには100以上の企業・組織が参画しており、多様な協働とイノベーション創出が期待される。

理論創薬研究室

理論計算を活用して得られた知見を、分子設計に反映させ、実験で確認することで薬学研究を進めています。実験では、構造解析を中心とした生化学実験ならびに設計薬物の有機合成を遂行しています。また国内外の研究者との共同研究も活発に行っています。例えば、小児がんの開発に向けては、NCI-CRUKのCancer Grand Challengesに関わる機会を得ています。また研究室で独自開発した抗体分子設計ソフトウェアが順調で、複数の共同研究が進んでいます。一例として、感染症の中和抗体の開発について、中国広州市の南方医科大学の研究者との研究協力を実施し、大学間の相互訪問をしています。



クラス通信

昭和34年卒業

私の記憶では、我がクラスの平均年齢は一年先輩よりも高かった。そのため、クラスの諸兄、諸姉の平均年齢は現在80台最後の年齢に達している。そんな我々も、定年を迎える頃から毎年、一泊の旅会などを開き、毎回10数人から20人ほどが参加していた。しかし、この旅会も2019年の帝国ホテル（ランチ会）を最後に取りやめになった。2016年頃から、旅会と並行して、錦糸町の船橋屋（天麩羅）で、2ヶ月おきにランチ会を開催していたが、その後、ランチ会に一本化された。毎回12人程が集い、談笑と天麩羅を楽しんでいた。残念ながらコロナがそれを中断に追い込んだ。そして、残ったのがZoomである。2020年8月から始まっている。中嶋啓介君と岩崎吉宏君の肝煎りである。パソコンとZoomのアプリがあれば、沖縄、大阪、東京の会員が自宅に居ながら、瞬時に一堂に会することが出来る。便利なものである。最多は14人が参加したが、残念ながら発起人の2人は体調を崩して退会された。現在は12人である。関根克己、宮崎桂次、山川雅延、神田昌一、斉藤友伸、長尾美奈子、津田穰、武田豊彦、木下恒、野村幸一の諸兄、諸姉に加えて私達、西井戸惇子、伊藤義人である。毎月末水曜日午後の開催である。世界、日本の情勢、身近にあったことなど高度の話題から病氣、介護、足の爪切りの苦労話など幅広い話題で談論風発、所定の1時間半は瞬く間に過ぎ去り、次回を約しての閉会となる。

この原稿の投稿直前に、中嶋啓介君の訃報に接しました。中嶋君は、大学時代からその旅立ちの直前まで、長年にわたりクラスの旅や集いの幹事などを務め、私たちの絆を深める役割を果たしてくれました。彼の温かい人柄と尽力に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

(西井戸、伊藤)

昭和36年卒業(三六会)

クラスの主力は昭和12、13年生まれで、本年度87、88歳になる。まだまだ元気な人が多い。今年は昭和で数えると昭和100年だそうである。この100年中で我々は生きて活動したことになる。ちょうど切りもよし、体力も限界だ。そこで、これまで毎年発行してきた消息を伝え合う会報も、また昼のクラス会も今年で終了することにした。卒業時48人で、現在消息がわかっているのは30人である。従って薬友会への報告も、毎年は行えなくなることをご了承いただきたい。

(村上 泰興)

(村上 泰興)

昭和37年卒業

昭和37年卒のクラス会は一昨年解散となった。しかし、集まれる人だけでも旧交を暖める機会を持ちたいとの話が出た。昭和37年卒に因んで毎年3月7日午前11時に東京日本橋レストラン東洋でランチをすることにした。幹事などなしでそれぞれランチをしに来る。

昨年は7人(男3名女4名)が顔を合わせることが出来た。長野の遠方から夏目智子さんが来てくれた。日本橋界隈の勤め人がランチに来るので、それなりのボリュームがある。アROUND85歳の旧友であるが、ペロリと全部平らげた。また、食べながらよくしゃべる。

学生時代の印象と異なる新発見もあり、約2時間の楽しい、しゃれたランチとなった。

学友の皆様毎年3月7日午前11時日本橋レストラン東洋
にお出掛けください。(真山 武志)

(真山 武志)

昭和39年卒業

昭和39年（1964年）卒業の我々は、2024年で丁度60年、還暦クラス会を10月11日に千葉そごう「美濃吉」で開催しました。酷暑の夏が10月になっても続いていましたが、当日は暑さも程々で晴れて、昨年延续了天候に恵まれた会になりました。卒業時36名の内、現在連絡の取れる方は26名ですが、出席者は12名でした。皆さんお元気で、近況報告後話が弾み、あつという間の2時間でした。久しぶりの千葉でしたので、ゐのはなに戻ってきた薬学部を訪ねましたが、大きく変わっており、今浦島状態でした。

今後ですが、対面クラス会が段々難しくなり、Zoomになるかなと予測しています。
(佐藤 敏子)

(佐藤 敏子)



昭和41年卒業(66会)

66会の皆様へ

R6年度(2024)の66会も幹事さん達の努力で無事に終わることが出来ました。今回は高瀬ご夫婦の計らいでアーティゾン美術館(旧ブリジストン美術館)での名画鑑賞、思わぬ眼福の刻を過ごすことが出来ました。その後は例年の如くの会食と団欒、皆様の近況報告等々で、17名(男6、女11)が参集しました。特に喜ぶべきことは小友姉がご主人と共に出席されたことです。皆様、80歳の舞台、とはいえ男女とも平均年齢には未だよとかで(老け込まないでね)、2026年は卒後60周年、66会も還暦、生まれ変われるのでしょうか？

末尾ですが、昨年3月に那波兄、6月に妹尾兄が永久の旅立ちとなってしまいました（合掌）。（深草 佑一）

(深草 佑一)



支部便り

東京支部便り

東京支部・千葉支部・神奈川支部による三支部合同総会が2024年10月25日18時30分から20時30分まで、日本橋茅場町の鉄鋼会館8階で開催されました。昭和35年卒から平成9年卒の17名が参加しました。小椋康光薬友会会長（薬学部長）から「千葉大学および薬学部の現状」と「小椋研究室の研究概要」についてお話を伺い、大学や薬学部や薬友会の現状並びに最先端の研究内容について情報提供いただきました。東京支部の会計報告の承認を得たあと懇談会に入りました。久しぶりにお会いする方もいらっしゃり話は尽きませんでした。また、国立医薬品食品衛生研究所や日本薬学会の動向など各方面でご活躍されている方のお話を伺いま

した。2025年も「鉄鋼会館」で三支部合同総会を開催する予定です。

（東京支部長 末永 昌文）



卒業アルバム

大正2年の卒業アルバムが寄贈されました。

千葉大学薬学部は、我が国で最も歴史のある薬学部であり、その歴史は明治23年（1890年）に設置された第一高等中学校医学部薬学科まで遡ることができます。昭和24年（1949年）に現在の名称である千葉大学薬学

部となりましたが、その前身となる千葉医科大学附属薬学専門部を大正2年（1913年）にご卒業された小林周蔵様のご家族様より、卒業アルバムと卒業証書を千葉大学薬友会に寄付いただきました。これは当時の研究・学生生活の様子を垣間見ることのできる大変貴重な資料です。薬友会事務局に丁重に保管しておりますので、ご興味のある方は是非ご覧ください。



卒業アルバム表紙



学校全景



集合写真



薬化学実習



調剤実習



小林周蔵様 卒業証書

サークル紹介

亥鼻祭実行委員会サークル

当団体は11月ごろに開催している亥鼻祭の企画運営を行っています。近年は薬学部、看護学部の学生が多く加入しています。現在は亥鼻3学部の1年生から6年生まで約80人で活動しています。2023年度には実地開催を実現し食販企画が復活しました。2024年度は前日の準備が雨の中で行われました。食販企画の出店数が昨年度の2倍になり、約2000人もの来場者の方々に学内団体企画や各学部企画をお楽しみいただきました。2025年度も11月頃の開催を予定しています。昨年度よりも多くの方々に楽しみいただけるように準備してまいります。応援の程よろしくお願いいたします。



薬学テニス部

私たち薬学テニス部は、週に1回西千葉キャンパスのテニスコートを使って活動しています。ここ数年は新型コロナウイルスの影響で練習やイベントの開催が制限されてしまいましたが、感染予防を徹底したうえでの練習を通して学生同士のつながりを作っていくことができました。年々部員数は少なくなっていますが、昨年度も新入生を迎え入れ、歴史ある薬学テニス部の活動を継続させています。今年度も少しずつ活動を盛り上げていき、貴重な大学生活という時間の中で活動を楽しみながら学部内のつながりをつくっていきけるような団体にしていきたいです。

薬学バスケットボールサークル

薬学バスケットボールサークルは、令和元年に設立された比較的新しい団体です。研究室に配属された学部生や大学院生を中心に、週一回、亥鼻キャンパスの体育館で主にゲーム形式の練習をしています。午後の早い時間に活動しているため、昼休憩の時間や実験の合間など、忙しい研究生活の中で、手の空いた時間に気軽に参加して、リフレッシュできる場となっています。また、経験の有無にかかわらず、誰もが楽しめる活動を心がけており、経験者が積極的に初心者に教えることで、バスケットボールの楽しさを伝えています。まだ人数は少ないので、より多くの学年や研究室を超えた交流が生まれる団体になれるように、メンバーを増やしていきたいです。

薬学茶道部

薬学茶道部は部員10人の部活で、外部の先生をお招きし、毎週金曜日にお稽古を行っています。昨年の亥鼻祭では、お客さんを招きお茶会を開きました。たくさんのお客様にお越しいただき、用意したお菓子を全て振舞うことができました。本番前までお稽古を重ね、様々な状況への対処などを部員全員で共有したことで、無事に亥鼻祭を成功させることができました。

コロナ禍では厳しい活動制限がかかっており、それに伴い新入部員も少なく、先生と部員2人だけで準備して、研究室が終わった部員が時間差で参加するといった期間もありました。しかし今年度、昨年度からは新たな部員も増え、茶道部にも活気が戻ってきました。これからも先生と生徒で協力しあいながら茶道を学び、たくさんの人にその魅力を伝えていきたいと思っています。



ヘルスケアイノベーションを推進しています。

ヘルスケアイノベーション。

それは健康を第一に考え、
より美しく、より楽しく、充実した日々を
過ごしたいと願う人々への
佐藤製薬からの提案であり、
企業理念です。



佐藤製薬株式会社

www.sato-seiyaku.co.jp
〒107-0051 東京都港区元赤坂1-5-27

学 部 だ よ り

教員の人事異動（R6.4.2～R7.4.1）

◎採用

R 6. 4. 22 LIU QIANQIAN 免疫微生物学 特任助教
R 6. 5. 1 村山 俊彦 薬効薬理学 特任教授
R 6. 7. 1 篠田 渉 薬学部 技術職員
R 7. 4. 1 山崎 伸吾 臨床薬物治療学 教授（医学部附属病院薬剤部 准教授より）
R 7. 4. 1 本村 瞳 臨床薬物治療学 特任助教
R 7. 4. 1 佐藤 信範 医薬品情報学 特任教授
R 7. 4. 1 桑原 弘行 医薬品情報学 特任准教授
R 7. 4. 1 鈴木 詔子 免疫微生物学 特任助教

◎昇任

R 6.10. 1 原田 慎吾 薬化学 准教授（薬化学 講師より）
R 6.10. 1 青木 重樹 生物薬剤学 准教授（生物薬剤学 講師より）
R 7. 2. 1 高屋 明子 感染制御学 教授（感染制御学 准教授より）

◎兼務

R 7. 4. 1 内田 雅士 医療薬学 准教授（医学部附属病院薬剤部 准教授）

◎早期退職

R 7. 3. 31 佐藤 信範 社会薬学 教授

◎辞職

R 6. 4. 30 鈴木 扶美子 薬学部 技術専門職員
R 6. 8. 31 鈴木 聡子 医薬品情報学 特任准教授
R 6.11.15 神崎 哲人 医薬品情報学 特任教授
R 7. 2. 19 KUNDU SUDESHNA 製剤工学 特任研究員
R 7. 3. 31 櫻田 大也 社会薬学 講師

◎任期満了退職

R 7. 3. 31 LIU QIANQIAN 免疫微生物学 特任助教

第110回 薬剤師国家試験合格状況

令和7年2月22,23日

新卒者合格率 98.0%（受験者 49名、合格者 48名）

既卒者（6年制課程）合格率 100%（受験者 3名、合格者 3名）

既卒者（4年制課程）及び科目等履修生合格率 80.0%（受験者 5名、合格者 4名）

2024年度 卒業生・修了生の進路

学部4年生 41名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府修士課程、東京大学大学院医学系研究科修士課程

学部6年生 50名

進 学：千葉大学医学薬学府 先端医学薬学専攻

企 業：大塚製薬(株)、第一三共(株)、アストラゼネカ(株)、アイン薬局、アイングループ、中外製薬(株)、
日本調剤(株)、(株)アインホールディングス、エーザイ(株)、アッヴィ合同会社、アクセンチュア(株)、
田辺三菱製薬(株)、生化学工業(株)、JCRファーマ(株)、大鵬薬品工業(株)、ロッテ、PDRファーマ、
ファイザー(株)、ノバルティス ファーマ(株)、グラクソ・スミスクライン(株)、ウエルシア薬局(株)、
総合メディカル(株)

病 院：千葉大学医学部附属病院、秋田大学医学部附属病院、国立がん研究センター中央病院、
がん研究会有明病院、聖マリアンナ医科大学病院、関東労災病院、板橋中央総合病院、
川崎協同病院

公 務 員：特許庁

そ の 他：国立研究開発法人国立成育医療研究センター、独立行政法人医薬品医療機器総合機構

修士課程 41名

- 進 学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程、
Purdue University (Department of Industrial and Molecular Pharmaceutics)、
東京科学大学物質理工学院
- 企 業：JNC(株)、Noster(株)、日本新薬(株)、大塚製薬(株)、アース製薬(株)、KBセーレン(株)、PDRファーマ(株)、
イーピーエス(株)、シミック(株)、興和(株)、IQVIAサービシーズジャパン合同会社、エーザイ(株)、
杏林製薬(株)、(株)アスパークメディカル、ノエビアグループ、(株)クレハ、東京応化工業(株)、
大鵬薬品工業(株)、UBE(株)、中外製薬(株)、三井住友(株)、三井化学(株)、
テクノプロ テクノプロ・R&D社、AGC(株)、富士フイルム富山化学(株)、日産化学(株)、味の素(株)
- そ の 他：みなとみらい特許事務所

博士課程 13名

- 企 業：ツムラ(株)、武田薬品工業(株)、日本プロセス(株)、中外製薬(株)、小野薬品工業(株)
- 病 院：千葉大学医学部附属病院
- そ の 他：国立医薬品食品衛生研究所、医用工学研究所、山本特許法律事務所、
UT Southwestern Medical Center

2025年度 薬学部入学者の状況

入学者数名 (男31名、女61名：推薦10名、前期70名、後期12名)

出身高校一覧

宇都宮 (栃木)、宇都宮女子 (栃木)、江戸川学園取手 (茨城)、清真学園 (茨城)、城西大学付属川越 (埼玉)、大宮 (埼玉)、
城北埼玉 (埼玉)、市立浦和 (埼玉)、県立川越 (埼玉)、東邦大学付属東邦 (千葉)、木更津 (千葉)、千葉東 (千葉)、
県立船橋 (千葉)、東葛飾 (千葉)、志学館高等部 (千葉)、市川 (千葉)、成東 (千葉)、佐倉 (千葉)、昭和学院
秀英 (千葉)、県立千葉 (千葉)、芝浦工業大学柏 (千葉)、佐原 (千葉)、渋谷教育学園幕張 (千葉)、学習院女
子高等科 (東京)、共立女子 (東京)、駒場東邦 (東京)、戸山 (東京)、江戸川女子 (東京)、桜美林 (東京)、三
田 (東京)、芝浦工業大学附属 (東京)、小金井市中央大学附属 (東京)、城東 (東京)、新宿 (東京)、青山 (東京)、
青稜 (東京)、竹早 (東京)、調布北 (東京)、東京学芸大学附属 (東京)、東京農業大学第一 (東京)、日比谷 (東
京)、白鷗 (東京)、白百合学園 (東京)、八王子学園八王子 (東京)、豊島岡女子学園 (東京)、麻布 (東京)、両
国 (東京)、雙葉 (東京)、頌栄女子学院 (東京)、横浜共立学園 (神奈川)、横浜翠嵐 (神奈川)、県立横須賀 (神
奈川)、県立相模原 (神奈川)、山手学院 (神奈川)、湘南 (神奈川)、川和 (神奈川)、南 (神奈川)、新潟南 (新潟)、
新潟 (新潟)、富山中部 (富山)、山梨学院 (山梨)、甲府南 (山梨)、諏訪清陵 (長野)、松本深志 (長野)、上田
(長野)、沼津東 (静岡)、瑞陵 (愛知)、神戸 (兵庫)、桐蔭 (和歌山)、都城泉ヶ丘 (宮崎)、鶴丸 (鹿児島)、沖
縄尚学 (沖縄)

(掲載について承諾を頂いた方の出身校名のみ掲載しております。)

2025年度 大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)

修士 (薬学領域) 入学 45名：総合薬品科学専攻 45名
博士 (薬学領域) 入学 16名：先端医学薬学専攻 (4年制) 7名
先端創薬科学専攻 (3年制) 9名

2024 年 の 受 賞 記 録

【教員の受賞】

令和6年2月	石井伊都子	医療薬学	2024年度日本薬剤学会永井記念国際女性科学者賞
令和6年3月	石川 勇人	中分子化学	日本薬学会学術振興賞
令和6年6月	山崎 伸吾	医療薬学	第98回日本感染症学会学術講演会・ 第72回日本化学療法学会総会合同学会 学術奨励賞
令和6年7月	竹村 晃典	生物薬剤学	日本毒性学会技術賞
令和6年9月	植田 圭祐	製剤工学	日本薬学会関東支部奨励賞
令和6年9月	小椋 康光	予防薬学	日本微量元素学会学会賞
令和6年10月	原田 慎吾	薬化学	MSD生命科学財団 Chemist Award BCA 2024
令和6年10月	原田 慎吾	薬化学	千葉大学先進学術賞
令和6年10月	杉山 龍介	遺伝子資源	令和6年度日本薬学会生薬天然物部会 奨励研究

令和6年11月	栗原 崇人	薬化学
令和6年11月	鈴木 博元	分子画像
令和6年11月	永島 一輝	実務薬学
令和6年11月	石川 雅之	医療薬学

【学生の受賞】

令和6年1月	加納	永梧	生化学
令和6年3月	瀬戸	陽介	感染制御学
令和6年3月	芝田	愛	感染制御学
令和6年3月	芳村	昂	中分子化学
令和6年3月	劉	偉	免疫微生物学
令和6年3月	小高	由子	薬化学
令和6年3月	薄木	謙治	臨床薬理学
令和6年3月	藤本	泰輝	製剤工学
令和6年3月	菅原	日向	製剤工学
令和6年3月	酒川	優泉	製剤工学
令和6年3月	西郷	鈴音	予防薬学
令和6年3月	廣瀬	華	薬効薬理学
令和6年5月	藤本	泰輝	製剤工学
令和6年5月	齊藤	智輝	製剤工学
令和6年6月	加納	永梧	生化学
令和6年6月	吉次	陸貴	薬効薬理学
令和6年6月	築山	風香	薬効薬理学
令和6年6月	野中	麻衣	生物薬剤学
令和6年6月	寺坂	有生	分子画像
令和6年6月	門脇	凌	薬効薬理学
令和6年6月	青山	杏	薬効薬理学
令和6年7月	金木	礼仁	薬化学
令和6年7月	安田	匠吾	薬物学
令和6年7月	藤本	泰輝	製剤工学
令和6年7月	福田	彩乃	予防薬学
令和6年7月	高橋	加鈴	予防薬学
令和6年7月	片山	陽菜乃	予防薬学
令和6年9月	菅原	一真	分子画像
令和6年9月	新井	夏花	薬効薬理学
令和6年9月	Kundu Sudeshna		製剤工学
令和6年9月	富田紗枝子		製剤工学
令和6年9月	関	優太	製剤工学
令和6年9月	内田	百香	予防薬学
令和6年9月	片山	愛美	予防薬学
令和6年9月	小関	雄太	遺伝子資源
令和6年11月	加納	永梧	生化学
令和6年11月	寺尾	法剛	生化学
令和6年11月	奥田	朱里	生化学
令和6年11月	晝間	大樹	中分子化学
令和6年11月	山崎	敬太	薬化学

成績優秀賞・論文優秀発表者賞

<学 部>

学長表彰

大野 元暉（薬学科 6 年生）

学部長表彰

竹村 知真（薬科学科 4 年生）

大野 元暉（薬学科 6 年生）

薬学科卒業論文発表会 優秀発表賞

田中 汐理

大野 元暉

松本 ゆきの

坂爪 美優

富田 紗枝子

林田 雪奈

酒井 涼花

三宅 梨紗子



卒業論文優秀賞発表

<大学院>

学長表彰（成績優秀賞）

藤本 泰輝（修士課程）

学長表彰（学術研究学生表彰）

藤本 泰輝（修士課程）

学府長表彰（成績優秀賞）

中嶋 佑太（博士課程）

藤本 泰輝（修士課程）

修士論文発表会 優秀発表賞

薄木 謙治

築山 風香

晝間 大樹

吉岡 鈴夏



修士論文発表会優秀発表者

TAKAZONO

New value for all
まだ見ぬ価値を創造する

健やかさの追求と未来の創造

すべての方の願いである健康のために
さまざまな変化に対応して
価値あるサービスや商品を
ベストを尽くして提供していくこと。
そのためにタカゾノは存在しています。

株式会社 タカゾノ

東京本社 〒104-0054 東京都中央区勝どき3丁目12番1号 FOREFRONT TOWER 6 階
大阪本社 〒571-0038 大阪府門真市柳田町4番17号

ライフサイエンスと未来の為に走り続ける

株式会社 薬研社

YAKUKENSHA CO., LTD.

研究機器オンライン 受託オンライン

メディカルナレッジ

薬剤師の生涯研修を動画学習で
サポートするe-Learning

- ✓ 研修認定薬剤師の単位を
オンラインのみで取得可能
- ✓ 専門医や専門薬剤師による
豊富なコンテンツから
自由に学べる
- ✓ 累計登録者数 **11万人**

年間新規配信
100
コンテンツ
以上!

今春、受講画面
リニューアル!

※開講中の為実際の画面と
異なる場合があります。

IME 医療教育研究所
Institute for Medical-care Education

Kyushu Medical

株式会社 九州メディカル

本物づくりで健やかづくり

薬剤師
募集

調剤薬局

バイオ研究

地域のおかげから世界のおかげまで

〒803-0814 福岡県北九州市小倉北区大手町13-4
<https://www.kmed.co.jp>

代表取締役 波多野倫丈(千葉大薬学部2001年卒)

薬友会より

ご寄付いただいた皆様

令和6年度にも皆様からのご支援を薬友会と薬学部（千葉大学基金）に賜りました。皆様のご協力に心から感謝を申し上げます。ここに寄付をいただいた方々のお名前を掲載させていただきます。

（五十音順、敬称略）

薬友会への支援

石井 靖男	川久保恵美子	許 奎璋	久野美和子	久保 元	久保田愛子
小泉 光正	齋藤 成子	佐藤 敏子	仲川 明子	中田 正子	西尾千恵子
野溝 春子	船田 久子	船田 久子	古田 尚平		
平成5年度卒業生有志一同（代表	藤田陽一郎）	堀部 秀俊	矢澤 秀典	横井 邦子	
吉木 康雄	吉田 淳（85P同期会幹事）	渡辺 吉郎			

薬学部（千葉大学基金）への支援

株式会社アイティーオー 熊坂 尋 館内 裕子 仲川 明子 山川 雅延
（お名前の公表を希望されていない方につきましては、掲載しておりません。）
今後も、皆様方の温かいご支援を何卒よろしくお願いいたします。

<ご寄付のお願い>

薬友会のさらなる活性化のため、ご寄付をお願い申し上げます。

一口2千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入ください。

■郵便局より振込の場合

振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会

■他金融機関より振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行	店 名：〇一九（ゼロイチキュー店）	店 番：019
預金種目：当座	口座番号：0551796	口 座 名：千葉大学薬友会

※千葉大学薬学部へのご寄付は、千葉大学基金から受け付けています。

個人からのご寄付の場合、寄付金が2,000円を超える場合は、税制上の優遇措置を受けることができます。インターネットからお申込みいただく場合、「寄付目的」の項目に「個別プロジェクトへの支援」、「支援先」の項目に「薬学部」とそれぞれ選択することで、ご寄付が可能です。千葉大学基金からの寄付に関する詳細は、「千葉大学基金」でご検索してご確認いただけます。薬学部の寄附ページに直接アクセスできるQRコードは以下に掲載しております。



ご不明な点は、TEL：043-290-2014、Email: kikin@office.chiba-u.jp お問い合わせ下さい。とくに銀行振込をご希望の場合、お問い合わせののち送付される銀行振込用紙を用いて指定の口座へお振込ください。

<訃報>

千葉大学名誉教授 畝本 力先生（90歳）におかれましては、令和6年2月26日（月）にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

<薬友会ホームページ>

薬友会ホームページ（<https://yakuyukai.net>）には、同窓会開催のお知らせや薬友会情報などを掲載しております。情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

ホームページから会員情報変更が可能です。<https://ours1.net/yakuyukai>（下記QRコード）にアクセスして頂くか、または薬友会ホームページの「住所変更」から、下記のIDおよびパスワードを入力してお入りください。従来通り、同封のハガキおよびEメールによるご連絡も可能です。

ID：●●●●●●●●●● パスワード：●●●●●●●●●●

薬友会事務局連絡先 【Eメール】 yakuyukai@chiba-u.jp
【FAX】 043-226-2930



変更連絡フォーム

<令和7年度各種委員会名簿>

（○印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。）

【総務委員会】○小椋 康光、福本 泰典、田中 佑樹、村上 泰興（S36）、伊藤 晃成（前委員長：アドバイザー）

【財務委員会】○石川 勇人、北島 満里子、楽満 憲太、村上 泰興（S36）、高野 博之（前委員長：アドバイザー）

【名簿委員会】○中村 浩之、宇津 美秋、村上 泰興（S36）、山崎 真巳（前委員長：アドバイザー）

【事業委員会】○山崎 真巳、吉本 尚子、杉山 龍介、伊藤 晃成（卒後教育）、佐藤洋美（卒後教育）、川島 博人（前委員長：アドバイザー）

【広報委員会】○西田 紀貴、趙 慶慈、伊藤 素行（前委員長：アドバイザー）

第33回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日 時：2025年7月5日（土） 14：00～17：00

場 所：千葉大学薬学部120周年記念講堂（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）
（〒260-8675 千葉市中央区亥鼻1-8-1）

主 催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

テ ー マ：「生命現象と分子」

生涯教育セミナー

「神経変性疾患と脂質代謝（仮）」

浦野 泰臣 先生（同志社大学生命医科学 教授）

「細胞内レドックス関連因子検出法の開発およびその応用（仮）」

藤川 雄太 先生（東京薬科大生命科学部 准教授）

「漢方メタボロミクスと薬理（仮）」

中谷 泰貴 先生（株式会社ツムラ 研究員）

宮木高明記念講演会

「デコイ分子の応用展開（仮）」

荘司 長三 先生（名古屋大学大学院理学研究科 教授）

セミナー参加費 無料

参加申し込み 不要です。当日お越し下さい。

お問い合わせ先 薬学研究院 遺伝子資源応用研究室 山崎真巳
(E-mail：mamiy@faculty.chiba-u.jp)

第123回卒後教育研修講座開催のお知らせ

本講座は既卒の薬剤師を主な対象とする勉強会です。在校生を含めてどなたでも参加できます。千葉大学大学院薬学研究院・薬友会・医学部附属病院薬剤部が共催します。令和7年度は、ウェブ形式で1回、2025年10月25日（土）13:00～16:30に開催予定です。講師：新井健一先生（千葉大病院・薬剤部）、鶴岡裕太先生（千葉大病院・臨床栄養部）、吉田宗弘先生（関西大学名誉教授）による、褥瘡ケア・栄養マネジメント・栄養素摂取基準のトピックとなります。薬剤師認定制度認定機構G13（一般社団法人 薬学ゼミナール生涯学習センター）より研修単位を発行予定です*。詳細は決定次第、千葉大学薬友会ホームページ<https://yakuyukai.net>でアナウンスさせていただきます。

※G01（公益財団法人日本薬剤師研修センター）やP04（一般社団法人日本病院薬剤師会）の他のプロバイダー単位等への受け入れは、各団体の規定の範囲内で可能です。

編集後記

薬友会報の編集を無事に終わることができ、お力添えを頂いた皆様に感謝申し上げます。亥鼻キャンパスでは満開の桜の下、II期棟前に千葉大薬学部の石碑銘板がお披露目されました。会員の皆様におかれましては、ぜひ千葉大薬学部に足をお運びいただきご覧いただければ幸いです。また昨今の厳しい財政状況を鑑み、今年度より会報への広告掲載を再開いたしました。千葉大学薬友会の持続的な運営のため、今後ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

広報委員会 会報担当部門 西田紀貴（委員長）、趙慶慈、伊藤素行（前委員長）